

日本語非母語話者による随筆テキストの読み —テキストの特性と読みの質について考える—

○李 榮 (神田外語大学)

山方純子 (神田外語大学)

キーワード: 随筆テキスト, 日本語非母語話者の読解, テキスト特性

問題と目的

第二言語としての日本語の読解指導には, 説明文がよく用いられている。しかし, 読解は知識獲得だけを目的とするのではなく, 我々が目にするのも論理的・実用的な文章に限らない。また, 筆者のものの見方や考え方を解釈・吟味する「読みの楽しみ」を味わうには, 随筆や小説等, より文学的な要素を含む文章の方が適していると言えるだろう。そこで, 随筆テキストを題材として, 日本語非母語話者の読みの実態を探った。日本における随筆の定義は曖昧だが, 「見慣れた日常や何気ない経験・社会の出来事等の中から, 作者(筆者)独自の感性(感じ方)や認識(見方), 考察・判断等を自由な形式で語った『短い文章や断章』」(佐藤・有田, 2014) と捉えることとする。

方 法

調査は, 非母語話者の大学院生 7 名を対象に行った。母語背景は様々である。随筆テキスト読みの質, 即ちどのように読んでいるかを調べるべく, 読後の理解内容の筆記再生課題を課した。

学生が読んだのは, 雑誌に掲載された随筆テキスト (1,979 字) である。「人々は三食をどうしているのか」「人はなぜ自炊するのか」という問題提起の後, 社会の状況と共に, 筆者の食生活や好み, 食への思いが, 毎日の行動や経験も交えて綴られる。その後, 独居の中高年層が抱える「食」の問題を取り上げ, それに絡めて「食＝生きること」という筆者の意見を述べている。

読みの質の分析に当たり, テキスト内情報を, (1)ある事象についての筆者の意見・考察, (2)筆者の内面に関わるもの(好みや感性等), (3)筆者に関わる事実・状況, (4)筆者による実際の行動, (5)筆者の経験, (6)筆者を取り巻く社会の状況・出来事, の 6 種類に分けた。(1)が筆者の最も伝えたい内容であり, それは(6)から抽出されたトピックに関するもので, (2)に裏付けられている。(3)～(5)は, これらを述べる上での前提となる情報である。即ち, テキスト内情報は(1)を軸に関連付けられ, 話題が展開していく。

結果と考察

筆記内容再生文を評定し, 再生率を算出した。本発表は, その再生率に開きのある学生 3 名 (A

12%・B 18%・C 31%) について報告する。

分析の結果, まず, 「筆者の内面」は, 全員読み取っていた。この部分は, 「食」にまつわる具体的な描写が多く, 語彙も日常的で, 読み取りやすかった可能性がある。しかし, 再生率の低い学生 A は他の言及が殆どなく, 断片的な情報の羅列に留まり, 情報間の繋がり, テキスト内での位置づけや役割までは把握できていない様子が窺えた。

「筆者の内面」の前提となる情報(事実・行動・経験)は学生 B・C 共に触れていたが, 「筆者の意見・考察」が読み取れていたのは再生率が最も高かった学生 C のみだった。学生 C は, 2 つの問題提起を把握し, 話題展開の枠組みを明示していた。日常の行動や経験に裏付けられた「筆者の内面」を読み取り, 「食」に関する社会問題とそれについての「筆者の意見・考察」, さらに筆者がその問題を自身に引き付け, 何を, どう感じているかもつかんでいる。即ち, この随筆テキスト全体の構造や情報間の繋がりが把握できていると推察される。

学生 B は, 不十分ながら問題提起や社会状況, 筆者の行動や経験について言及していたが, 「意見・考察」には触れていなかった。情報の構造や繋がりへの意識はある程度見られたが, 各々が担う役割の把握には至らなかったと思われる。

随筆テキストは, 筆者の感性に基づいた自由な形式で書かれることが多い。だからこそ, 筆者が伝えたいことの正確な理解には, 個々の語彙や文法表現だけでなく, テキスト全体を俯瞰し, 構成を把握する力が大きく影響しているのではないだろうか。また, 筆者の日常から紡ぎだされるトピックの表面的な馴染み深さに惑わされることなく, 情報を丁寧に読み解く目と, それらを適切に関連付ける目を, 同時に持つことが重要だと考える。

今後は, 日本語非母語話者がどのような読み誤りをしているのか, その内容と理由を分析し, 具体的な指導法へと繋げていきたい。

引用文献

- 佐藤洋一・有田弘樹 (2014). 随筆教材のテキスト形式を生かす「習得・活用」「批評」—「自立・協働・創造」につながる授業の開発 愛知教育大学研究報告・教育科学編, 63, 163-171.
高村 薫 (2013). 食べることは生きること? クロワッサン・プレミアム, 10, 112-113.